

順治二年（1645）の蘇州（5）

滝野 邦雄

五月二十七日

二十七日，〔黃家鼎たちは〕復た迎えられ入城し，兵道府中に坐す。冊籍 已に獻じ，武弁・士民 踵を接して進見（お目通りする）す。人 以て大事 已に定まれりと爲す（『吳城日記』卷上・「乙酉（順治二年）五月二十七日」条・二〇六頁）。

（二十七日，黃家鼎たちは，また迎えられて城内に入り，兵道府中に落ち着いた。冊籍はすでに提出されており，軍人や人々は続々とお目通りにでかけた。人々は，大事はすでに定まったと思った）

黃家鼎たちは，再び城内に迎えられ，蘇松常兵備道の役所（いまの道前街 170 號にあった）に落ち着いた。行政文書などが提出されたので，蘇州の接收は無事に完了したと，人々は考えたという。

なお、『江南聞見録』によると，清政権は，この五月二十七日に兵士三千人を蘇州・杭州に派遣して，投降書の提出を求めようとした。ただ，この時点では，黃家鼎が殺害されたために兵士を派遣しただけでなかったという。

〔弘光元年（順治二年）五月〕二十七日，〔南京より〕兵 三千人を發し，蘇〔州〕・杭〔州〕に往きて降冊を催討（催促する）す。此の時，尙お未だ楊文驄の黃家鼎等の官を殺すを知らざるなり（『明季稗史初編』卷十九所收『江南聞見録』・「〔弘光元年（順治二年）五月二十七日〕」条）。

『明季南略』では，五月二十九日に掛けて，派遣した兵士の数を八万人としている。

〔弘光元年（順治二年）五月二十九日〕，豫王 調兵（派遣軍）八萬をして蘇〔州〕・杭〔州〕に下らしむ・・・（『明季南略』卷之四・「〔弘光元年（順治二年）五月〕二十九庚戌」条）。

五月二十八日

蘇州の接收は無事に終わったと人々が思った翌日，福王政権で右僉都巡撫蘇松常鎮楊五府（『明季甲乙彙編』卷之三・『明季甲乙兩年彙略』卷之三による：それ以前は京口監軍であった）の地位にあった楊文驄が，東南の城門である葑門の外のある接渡橋（蘇州城の東南角にある覓渡橋：『丹午筆記』による）に，手兵を引き連れて舟を停泊させる。『蘇城記變』は，つぎのように伝えている。

二十八日、忽ち楊監軍（楊文驄）なる者、舟を接渡橋（覓渡橋）の下に停む（『蘇城紀變』不分卷・二葉・國學保存會印『國粹叢書』第三集・光緒三十二年（一九〇六）發行）。

（二十八日に、にわかに楊監軍（楊文驄）が、舟を蘇州城東南にある葑門外の接渡橋（覓渡橋）の下に停泊した）

文秉は、『甲乙事案』において、五月八日の時点で、楊文驄は、自分の故郷である黔（貴州）出身の五百名の兵士を率いていたと伝える。

・・・黔兵の楊文驄に従う者は止だ五百人を存するのみ・・・（『甲乙事案』卷下・「弘光元年（順治二年）五月己丑（初八日）」条）。

そして、蘇州にたどり着いた時も、五百名であったという。

鎮江監軍の楊文驄 安撫の黃家鼐を殺す。

〔楊〕文驄 黔兵五百を率い、鎮江より南奔して蘇〔州〕を過ぐ・・・（『甲乙事案』卷下・「順治二年（弘光元年）五月」条）。

五月二十九日

楊文驄は、蘇州に到着した翌朝、清政権が派遣した黃家鼐を詭計を用い捕らえて処刑する。

忽ち二十九日清晨、常鎮監軍の楊文驄と都司（大尉に相当）の朱國臣とは共に謀り、營兵（士兵）をして黃安撫（黃家鼐）に進見（謁見）し謝賞（賞与を受けたお礼をいう）せしむ。〔そして〕其の不意に出で、黃家鼐・黃家謨^①・吳參將并せて隨從する廿一人を執え、葑門外に綁去し、俱に首を斬り腹を剖き、親隨（側近）の二人も亦た斬る。周子靜〔眉批：周子靜は即ち周荃の字なり〕は、知風（情報を察知する）して先に遁れ、難を免るを得たり。急ぎ南京に往きて、「民心の歸順を極知（十分に理解する）す。此の舉は楊監軍（楊文驄）の詭謀に出ず」と報知（報告）す。其の先に入るの言あるを幸いとするのみ（『吳城日記』卷上・「乙酉（順治二年）五月二十九日」条・二〇六頁）。

①黃家謨：『啓禎記聞錄』は、「黃嘉模」に作る。

②極知民心歸順：『啓禎記聞錄』は、「極知民心已歸順」に作る。

③幸其先入之言耳：『啓禎記聞錄』は、「幸其有先入之言耳」に作る。

（二十九日の早朝、常鎮監軍の楊文驄と都司（大尉に相当）の朱國臣とは共謀して、兵士を派遣して、黃家鼐に謁見して賞与を受けたお礼を述べさせた。そして、その油断につけこみ、黃家鼐・黃家謨（黃嘉模）・吳參將や従者など二十一人を捕らえて、東南の葑門城外に連行して殺害した。側近の二人も殺害した。周荃は情報を察知して、先に逃げ出し、難を逃れることができた。そして急いで南京に向かい、「民心は帰順していることは十分に理解しております。この行いは楊文驄の策謀に出たものです」と報告した。まずこの〔周荃の〕報告が伝えられたことを幸いとするだけである）

楊文驄は、運河沿いに軍勢を引き連れ、舟を接渡橋（蘇州城の東南角にある覓渡橋：『丹午筆記』による）に泊める。そして詭計を用いて清政権から派遣された黃家鼎などを捕らえ、そのまま北にある葑門に連行し、処刑した。ただ、黃家鼎とともに派遣された周荃は、うまく避難することができ、急いで南京に行き、この事件は、楊文驄自身の策謀であり、蘇州の人々にはかわっていないということを最初に伝えたという。『吳城日記』の筆者は、蘇州出身の周荃の報告で、蘇州の人々がこの事件に巻き込まれることがないことを願っているのである。

『蘇城記變』は、この事件をつぎのように伝える。

二十九日清晨、[楊文驄が] 都司（大尉に相当）の朱國臣をして黃安撫（黃家鼎）并せて其の黨四人を擒え、之を戮さしむ。周通判（周荃）遁れ免る。[楊] 文驄は、「色厲しく内荏なり^①」。北兵の且に至らんとするを偵知し、遂に六月三日の昧爽（黎明）に於いて鼠竄（鼠のようにあわただしく逃走する）の舉を爲す。[楊] 文驄 一たび去りて、人心 益々惶悚にして措く無し（『蘇城紀變』不分卷・二葉・國學保存會印『國粹叢書』第三集・光緒三十二年（一九〇六）發行）。

①『論語』陽貨に「子曰、色厲而内荏、譬諸小人、其猶穿窬之盜也與（子曰く、色厲しくして（外貌の威厳がある）内荏らか（内心の柔弱なこと）なるは、諸を小人に譬えれば、其れ猶お穿窬（壁を穿ち牆を乗り越える）の盜のごときか）」。

（二十九日の早朝、[楊文驄が] 都司の朱國臣を使って安撫の黃家鼎とその一味の四人を捕らえさせ、これを殺した。通判の周荃は逃げて助かった。楊文驄は、外見ばかりのかっこうつけで中身はまったくだめであった。清朝の軍が到着しそうだということを察知して、六月三日の朝方に、鼠のようにあわただしく逃げ出してしまった。楊文驄が行ってしまうと、人々はますます恐れおののいてどうしようもなくなった）

『蘇城紀變』は、楊文驄が蘇州を逃げ出した後に記したためなのか、楊文驄に対して批判的である。また、『吳城日記』の筆者と同様に、蘇州在住の人間として、清政権がどのような報復処置をとるのか心配する。

この事件は、各書に記されている。『國榷』は、楊文驄が詭計を用いて黃家鼎を殺害したという事実のみを伝える。

[五月] 戊申（二十七日）、鴻臚寺少卿の黃家鼎 蘇州に至る。巡撫の霍達 太湖に走る。官民 [黃] 家鼎を迎え、治に入る。次日（二十八日）、[黃] 家鼎 師を犒う。楊文驄 兵をして偽りて謝賞を爲さしめ、立ちどころに [黃] 家鼎を殺す（『國榷』卷一百四・弘光元年・「五月戊申（二十七日）」条・六二一六頁）。

五月二十七日、清政権から派遣された鴻臚寺少卿の黃家鼎が蘇州に到着した。南明政権の巡撫であった霍達は、太湖に逃げ出した。官民ともに黃家鼎を出迎え、黃家鼎は役所に入った。翌日、黃家鼎は、軍に賞与をあたえねざった。南明政権の楊文驄が自分の兵士をつかって、偽って感謝させ、すぐさま黃家鼎を殺した、というのである。

『明季甲乙兩年彙編』もほぼ同文であるが、逃げ出した巡撫の霍達が蘇州にまた帰ってきたと付け加える¹⁾。

[五月] 戊申 (二十七日), …… 黃家鼎 蘇州に至る。撫臣の霍達 太湖に走る。官民 [黃家] 鼎^{ママ}を迎え, 治に入る。次日, [黃家] 鼎^{ママ} 軍を賞す。楊文聰 兵をして偽りて謝賞 (賞与を受けたお礼をいう) を爲さしめ, 奮起して [黃] 家鼎を殺す。霍達 郡に復歸す (『明季甲乙兩年彙編』 卷之三・「[弘光元年 (順治二年) 五月] 戊申 (二十七日)」条)。

①『明季甲乙兩年彙編』について, 謝國楨は, 『增訂晚明史籍考』で,

按ずるに…… 甲乙之際を記すの書 甚だ繁 (多い) なり。當に此の本を以て最も詳しと爲すべし。惟だ雜記遺事, 間に傳聞の詞有り。此れ亦た野史の中の免る能わざる所なり…… (『增訂晚明史籍考』 卷八・甲乙之際・「明季甲乙兩年彙編四卷」条)。

と記している。

清政権から派遣された黃家鼎が蘇州に到着した。南明政権の巡撫であった霍達は, 太湖に逃げ出した。官民ともに黃家鼎を出迎え, 黃家鼎は役所に入った。翌日, 黃家鼎は, 軍に賞与をあたえた。南明政権の楊文聰が自分の兵士をつかって, 偽って賞与を受けたお礼をさせ, 奮い立って黃家鼎を殺した。そして, 南明政権の巡撫の霍達は, 蘇州に戻ってきた, という。

『南渡錄』は, つぎのようにいう。

九 (六) 月□□, 劉光斗・黃家鼎 北の安撫の命を以て江南に至る。巡撫の楊文聰 遁る。是の時, 蘇・松等の處の各邑 起義する者多し。[楊] 文聰 兵を勒 (統率) し蘇 [州] に入り, [黃] 家鼎を執え, 之を斬る。尋いで北兵の大いに至るを見て, 仍お遁れて海に入る (『南渡錄』 卷之六・「六月□□」条)。

1) この文の流れからすると, 福王政権から巡撫に任命された霍達は, 清政権から派遣された黃家鼎が蘇州に到着すると, 太湖に逃げ出す。そして, 南明政権の楊文聰が黃家鼎を殺害すると, 蘇州に戻ってきた, と理解できる。

しかし本稿 (1) の 119 頁で, 検討したように, 霍達は, 楊文聰逃亡の後, すぐに清政権への投誠が認められている。

なお, 『嘉定縣乙酉紀事』の「弘光元年 (順治二年) 五月十五日丙申」条の割注に,

[弘光元年 (順治二年) 五月] 二十八日己酉, 前の監軍の楊文聰 黃家鼎を蘇州に殺す。

霍撫 (霍達) 郡に復歸す (痛史本『嘉定縣乙酉紀事』不分卷・「弘光元年 (順治二年) 五月十五日丙申」条・一葉・「痛史」第十一種所收本・辛亥 (一九一一年) 十一月初版)。

とある。『嘉定縣乙酉紀事』の割注は, 『明季甲乙兩年彙編』か, もしくは『明季甲乙兩年彙編』や『國榷』が基づいた史料によったと推測できる。ただし, 『國榷』と異なり, 「霍撫 (霍達) 郡に復歸す」という記録は, そのまま伝える。

『國榷』は順治十年 (一六五三) 頃に書き上げられた。また, 『明季甲乙兩年彙編』自序には「順治改元の三秋」とあるので, 『明季甲乙兩年彙編』は順治三年 (一六四六) 頃に書き上げられたと考えられる。成書の時期が近く, 両書ともに同系統の史料に基づいた記述だと想定できるが, どうして『國榷』の撰者の談遷のみが, 「霍撫 (霍達) 郡に復歸す」という記録を除いたのか分らない。もっともそれほど深い意味はないのかもしれない。

劉光斗・黃家鼎は、清政権から平穩に接収することを命ぜられ江南にやってきた。南明政権の巡撫の楊文驄は、逃げ出した。この時、蘇州・松江などの都市では、蜂起するものが多かった。楊文驄は、兵を統率して蘇州に入り、黃家鼎を捕らえて斬った。そして、清政権の軍勢がやってくるのを見て、海に赴き逃げた、という。

顧苓の『金陵野鈔』は、

六月、女直 蘇州に入る。是れより先、楊文驄 奔りて蘇州に至る。女直 前の鴻臚寺少卿の黃家鼎を遣りて蘇州を安撫さす。〔楊〕文驄 之を斬る（『金陵野鈔』不分卷）。

と述べる。

文秉の『甲乙事案』には、

鎮江監軍の楊文驄 安撫の黃家鼎を殺す。

〔楊〕文驄 黔（貴州）兵五百を率い、鎮江より南奔して蘇〔州〕を過るに、適たま太監の李國輔²⁾も亦た至る。不意に乗じて猝に入城し、〔黃〕家鼎を執え、其の罪を數えて之を殺す。周荃 風を聞きて先に逃る。〔楊〕文驄 遂に自ら巡撫の事を行なう（『甲乙事案』卷下・「順治二年（弘光元年）五月」条）。

とある。楊文驄は、黔（貴州）の兵士五百人を率い、鎮江から南に向かい、蘇州に立ち寄った。たまたま南明の福王弘光帝に仕えた宦官の李國輔もやってきた。そして、不意を突いてにわかに入城して、黃家鼎を捕らえ、その罪状を宣告して殺害した。周荃は、事前に察知して逃げ出した。楊文驄は、こういうわけで自分から巡撫となった、というのである。

文秉の伝えるところによれば、楊文驄みずから巡撫となって行政を行なったという（「六月二日」条参照）。

また、文秉の『甲乙事案』にのみ記されているのであるが、楊文驄が蘇州に来た時に、太監の李國輔も蘇州にたどり着いたと伝えている。徐鼎の『小腆紀傳』（卷第六十一・列傳第五十四・宦官・「李國輔」条：本稿六十二頁（注2）参照）は、おそらくこの記述によって、「走蘇州與巡撫楊文驄殺我安撫使黃家鼎（蘇州に走り、巡撫の楊文驄と我が安撫使の黃家鼎を殺す）」と記す。ただ、蘇州城内でこの事件を見ていた『吳城日記』と『蘇城紀變』の著者たちは、「李國輔」の名前を記録していない。

なお、『明季南略』は、李國輔を張永になぞらえている。

〔李〕國輔は、係れ大司禮の韓贊周の養子なり。〔韓〕贊周は闍寺中の正人なり。心を時事に傷つけ、門を杜して休沐（引退）す。〔李〕國輔 時に宮中に在りて、毎に匡救する有り。時人 張永^①を以て之を目す……（『明季南略』卷之三・「吳适論雲霧山」）。

①張永（字は德延、号は守菴。保定新安の人。成化元年七月二十六日～嘉靖七年十二月三十日）は、武宗正徳帝の時に絶大な権力を持った宦官劉瑾とともに武宗正徳帝の信任を得ていたが（八虎のひとりであった）、劉瑾と仲たがひし、劉瑾を誅殺するに至る（楊一清の「司禮太監張公永墓誌銘」（『國朝獻徵録』卷之一百十七・二十六葉～三十葉）所引による）。寧王宸濠の叛乱鎮圧にあたって、王陽明とかかわった人物でもある。

李國輔は、大司禮の韓贊周の養子である。韓贊周は、宦官の中の正人である。時勢に心を痛め門を閉ざして引退していた。李國輔は、福王弘光帝の宮中にいて、状況を正そうとした。そのため、当時の人たちは、武宗正徳帝の宦官の張永のようだとした、という。

また、祁彪佳は、六月五日の日記につぎのように記している。

[六月] 初五日、……是の日、吳門 僞安撫の三人を殺すと聞く。蓋し吳門の守土する者は盡く逃れ、適たま楊龍友（楊文驄）沿江巡撫〔の官職〕を以て至り、遂に楊孝廉維斗（楊廷樞）と同じく事を舉ぐるなり……（『祁忠敏公日記』乙酉日曆・「六月初五日」条・十七葉）。

- ✓ 2) 後の編纂であるが、徐鼎（字は彝舟、号は亦才。江蘇六合の人。嘉慶十五年（一八一〇）～同治元年（一八六二）。道光二十五年乙巳恩科（一八四五）三甲六十六名の進士）の『小腆紀傳』は、李國輔の事績についてつぎのように伝える。

李國輔、司禮監の韓贊周の養子なり、宏（弘）光の時、勇衛營を提督（指図して監督する）す。内臣の屈尙忠・田成・張執中の徒 方に馬士英・阮大鍼に比（近づく）して上（福王弘光帝）を淫戯に導かんとす。而して〔李〕國輔 事に遇うたびに匡救（正して挽回する）す。〔馬〕士英 之を惡む。私する所に屬（委託）して、上書させて言う、「開化徳興の雲霧山（安徽省）開採（採掘する）す可し」と。〔李〕國輔 之に惑いて具疏して往かんことを請う。既にして給事中の吳适 疏もて七不便を陳す。〔李〕國輔 も亦た請中撤。俱に許されず。馳せ視れば〔吳〕适の言の如し。〔そこで〕報罷（指示を取りやめる）。而れども督する所の勇衛營 已に〔馬〕士英の子の〔馬〕錫に命じて之に代う。南都 亡び、蘇州に走り、巡撫の楊文驄と〔一緒になって〕我が安撫使の黃家鼎を殺す。王師 進討し、海上に走り、巡撫の田仰・監軍道の荊本澈 義陽王なる者を奉じて舟師を以て崇明沙に駐す。事 敗れ、魯監國に歸す。〔魯監國は〕、命じて太監の客鳳儀と軍餉を兼制せしむ。舟山 覆り、監國に従いて厦門に流寓し以て終る（光緒十三年金陵刻『小腆紀傳』卷第六十一・列傳第五十四・宦官・「李國輔」条・一葉～二葉）。

①『明季南略』卷之三・「吳适論雲霧山」条に、この「七不便」は、「弘光元年（順治二年）二月六日」に提出され、以下のようなものであると要約して紹介されている。

- （一）鄧茂七が反乱の拠点としたような僻地であり、開発が困難である。
- （二）開発作業を行なうと従事する人たちが多く傷つく。
- （三）開発しても、輸送に困難な場所である。
- （四）派遣された官員が不正を行ない、当地の人々を苦しめる。
- （五）無益有害なことに重臣を派遣すると、人心や地方を動揺させ、後世からそしめられる。
- （六）現地を混乱させることから、当地の盜賊を復活させることに繋がる。
- （七）地脈が走っているところであり、開削を行なうと、明王朝の運氣を傷つける。

李國輔は、司禮監太監の韓贊周の養子である。南明の福王弘光帝の時に、勇衛營を指図して監督した。宦官の屈尙忠・田成・張執中の輩は、馬士英・阮大鍼に近づいて福王弘光帝を遊興の道に導いていた。ところが李國輔は、機会があるたびにその状況を正そうとしたので、馬士英は李國輔を苦々しく思った。そこで、馬士英は、私淑する者に依託して、「雲霧山（安徽省）の鉞山は開発できます」と奏上させた。李國輔は、これに惑わされて、上疏して雲霧山（安徽省）に行くことを願い出た。そうしたところ、給事中の吳适がその「七不便」を奏上した。李國輔も出発命令の撤回を願い出たが、すべて認められなかった。現地に赴いてみると、吳适の言うとおりであった。そこで鉞山開発の命令は取りやめになった。しかしながら、もともと監督していた勇衛營の指揮権は、すでに馬士英の子の馬錫に代えてあたえられたいた。南明の福王弘光帝の政權が崩壊し、蘇州に逃げ、巡撫の楊文驄とともに清政權から派遣された安撫使の黃家鼎を殺害した。清政權の軍勢が侵攻すると、海上に逃れ、巡撫の田仰・監軍道の荊本澈と義陽王を奉じて軍船を用いて長江河口の崇明に駐在した。また、それが失敗し、魯監國のもとに行った。魯監國は、宦官の客鳳儀とともに軍餉を管理することを命じた。魯監國の拠点の舟山も陥落し、魯監國に従って厦門に流れて行って、亡くなった、という。

祁彪佳は、蘇州の地方官はすべて逃げ出し、たまたま沿江巡撫の楊文驄と楊維斗とが事を挙げて、清政権から派遣された安撫の三人を殺害したという。祁彪佳のいた紹興には、楊文驄は、楊廷樞と同じく事を挙げたと伝わっていたようである。それだけ、江南の人たちの間に、楊廷樞に対する期待感があつたのであろうか（拙稿「清初における楊廷樞について」『経済理論』382号参照）。ただし、『石匱書後集』（卷第二十八）によると、この時期、楊廷樞は、家族を連れて洞庭山中に匿れていた。

後の記録になるが、康熙『蘇州府志』は、つぎのように伝える。

國朝順治二年五月……豫王 兵を統べて江南を平し、檄（通達）を各郡に傳えて、版籍（戸籍簿）を徵む。^{もと}〔そして〕能く檄もて蘇州に行く者を募す。吳縣の周荃は、時に金陵に在りて割街船政通判なり。或ひと薦め、崇明の人の鴻臚寺卿の黃家鼐を安撫正使と爲し、〔周〕荃を以て之に副とす。^{はじ}甫めて郡に抵る。^{たま}適たま故明の監軍の楊文驄の潰兵 至り、〔黃〕家鼐を執えて之を滅（覓）渡橋に戮す。〔周〕荃 逸れ去るも、其の家人の張留^①を戮し、併せて〔周〕荃の友の太學の顧凝遠を執う。〔顧〕凝遠の子の諸生の〔顧〕樂胥 父の執わるるを聞き、倉皇に難に赴きて、代り死せんことを願い、父 凶命（危機を脱する）を得。〔顧〕樂胥 軍前に解られ、^{おく}釋さるるを得。^{ゆる}越えて三日、都督の李延齡・總兵の土國寶 露刃もて南下す。〔楊〕文驄の兵 逃（逃）れ散去す……（康熙『蘇州府志』卷第八十一・雜記二・四十五葉～四十六葉）。³⁾

①張留については、いまのところよく分らない。『吳城日記』の六月一日条にある「周安撫（周荃）の家奴」のことであろうか。

順治二年五月、清政権の豫王は軍を引き連れて江南を平定した。そして通達を各地に送り、戸籍を取り立てた。また、通達を出して蘇州に出向く者を募った。吳縣の周荃は、この時には金陵に滞在していて、船政通判に任ぜられていた。ある人の推薦で、崇明の人の鴻臚寺卿の黃家鼐を安撫正使とし、周荃を副使とした。蘇州に到着すると、たまたま故明の監軍の楊文驄の敗残兵がやってきた。そして、黃家鼐を捕らえて、覓渡橋で殺害した。周荃は逃れることができたが、周荃の使用人の張留を殺害した。それと同時に、周荃の友人の大学生の顧凝遠〔字は青霞〕を捕らえた。顧凝遠の子供の諸生の顧樂胥は、父親が逮捕されたと聞き、あわてて助けに行き、身代わりになって死ぬことを願い出たので、父親の顧凝遠は危ういところを脱することができた。顧樂胥は、軍中に送致されたが解放された。三日後、清政権の都督の李延齡と總兵の土國寶が軍勢を引き連れて南下してきたので、楊文驄の兵士は逃げだし、ばらばらに去って行った、という。

楊文驄は、周荃を捕らえることはできなかったが、使用人の張留を殺害し、周荃の友人の顧凝遠を拘束したと伝える。

周荃の友人の顧凝遠について、乾隆『長洲縣志』は、つぎのように伝える。ただし、子の顧樂胥のおかげで助かったということは記していない。

顧凝遠、字は青霞、^①〔顧〕九思の孫なり。祖父の蔭を承くるも、絶えて紈綺（有力者の子弟）を遠ざく。刻として風雅を尙とび、隱居して仕えず、室を齊門に築く。即ち今の花谿なり。多く圖書・彝鼎・商周の法物を蓄う。素より文震孟・周順昌・姚希孟諸人と善し。時に相い過從（往来）して古今を談討し、置酒歡笑す。復た人間の名利の事を知らず。尤も畫理（絵画の原理）に通じ、小李將軍^③の層巒疊嶂（重なりあった山峰）・金碧・攢蹙（顔料の重ね具合）を師とす。華亭の董其昌 嘗て三たび過ぐとし三たび之に跋（跋）す。晩年は惟だ畫を以て自から娛しむ。後、門下の客 驟かに貴しとなるに因り、之を引かんと欲す。〔ところが、顧凝遠は〕爲めに重ねて就くを屑しとせず。客 之を銜^{うら}み、將に計を設けて傾陷（陥れる）し、避地に轉徙さす。是^{これ}を用って破家（家産を尽くす）し窮まり愁い以て卒す（乾隆『長洲縣志』卷之二十四・人物三・「顧凝遠」条・六十二葉）。

①顧九思：申時行の『賜問堂集』（卷三十・「中憲大夫通政司右通政進階亞中大夫顧公墓誌銘」条・二十三葉～二十八葉）によれば、字は與庵、號は韋所。江蘇長洲の人。嘉靖十一年（一五三二）～萬曆三十八年（一六一〇）。隆慶四年（一五七〇）の舉人。隆慶五年辛未科（一五七一）三甲一百六十九名の進士。豐城縣知縣・戸科給事中・太僕少卿・通政司右通政などを歴任する。

②同治『蘇州府志』（卷第四十六・第宅園林二・元和縣・明・「芳草園」条・三十三葉）によれば、（定跨

- ✓ 3) 顧公燮（字は丹午、号は澹湖・擔瓠。『蘇州府長元吳三邑諸生譜（扉は『國朝三邑諸生譜』）』卷四・七葉によると乾隆十三年戊辰（一七四八年）の尹（尹會一）宗師（學政）歲試の吳縣の諸生の『丹午筆記』にもほぼ同じ内容のことを伝えている。「大兵 至り、土民 各々「順民」二字を門に書して、争うて羊酒を持して迎候す」ということが加えられている。

順治二年乙酉五月、豫王 兵を統べて江南を平らぐ。檄（通達）を各郡に傳え、板籍（戸籍）を徴す。能く檄（通達）して蘇州に行く者を募る。吳縣の周荃 時に金陵に在りて扎御船通判たり（康熙『蘇州府志』は「在金陵割衙船政通判」に作る）。或ひと薦めて崇明の人の鴻臚寺卿の黃家鼎を安撫正使と爲し、〔周〕荃を以て之に副とす。甫めて郡に抵り、適^{なま}たま故明の監軍蘇松巡撫の楊文聰の潰兵 至り、〔黃〕家鼎を執え之を覓渡橋に殺す。〔周〕荃 逸れ去る。其の家人の張留を戮し、并せて〔周〕荃の友の太學生の顧凝遠、號は青霞、を執う。〔顧〕凝遠の子の諸生の樂胥 父の執わるるを聞き、倉皇して難に赴き、代わり死せんことを願い、父 亡命（危機を脱する）を得。〔顧〕樂胥 軍前に解られ釋さるるを得。越えて三日、都督の李公延齡・總兵の土公國寶 露刃して南下すれば、〔楊〕文聰 宵遁（夜に紛れて逃走する）す。大兵 至り、土民 各々「順民」二字を門に書して、争うて羊酒を持して迎候（出迎える）す（『丹午筆記』不分卷・二十七「平定姑蘇始末」条：『江蘇地方文獻叢書』の『丹午筆記・吳城日記・五石脂』（江蘇古籍出版社1999年刊）による）。

順治二年五月、清政權の豫王は軍を引き連れて江南を平定した。そして通達を各地に送り、戸籍を提出させた。また、通達を出して蘇州に向く者を募った。吳縣の周荃は、この時には金陵にいて、御船（船政）通判に任ぜられていた。ある人の推薦で崇明の人の鴻臚寺卿の黃家鼎を安撫正使とし、周荃を副使とした。蘇州に到着すると、たまたま故明の監軍蘇松巡撫の楊文聰の敗残兵がやってきた。そして、黃家鼎を捕らえて、覓渡橋で殺害した。周荃は逃れることができた。そこで、周荃の使用人の張留を殺害した。それと同時に、周荃の友人の太學生の顧凝遠〔字は青霞〕を捕らえた。顧凝遠の子供の諸生の顧樂胥は、父親が逮捕されたと聞き、あわてて助けに行き、身代わりになって死ぬことを願い出たので、父親の顧凝遠は危ういところを脱することができた。顧樂胥は、軍中に送致されたが解放された。三日後、清政權の都督の李延齡と總兵の土國寶が軍勢を引き連れて南下してきたので、楊文聰は夜間に紛れて逃走した。清政權の軍が到着すると、人々はそれぞれ「順民」の二字を門に記し、肉や酒などの歓迎の品を用意して出迎えた、という。

橋（王審の『宋平江城坊考』（巻四・東北隅・「跨塘橋」条）によれば「跨塘橋」の誤りという。）平化橋の北にあり、清の初めには、周荃がここに居たという。

③唐の李昭道。宗室で画家であった李思訓が「右武衛大將軍」であったので、その画を「李將軍山水」と言った（『新唐書』巻七十八・列傳第三・宗室・「彭國公思訓」条）。ここから、その子の李思訓を「小李將軍」とした。

顧凝遠は、字は青霞といい、顧九思の孫である。祖父の恩蔭を得たというものの、有力者の子弟を近づけなかった。ひたすら風雅をとうとび、隠居して仕官しようとしなかった。齊門に邸宅を築いた。いまの「花谿」である。図書・殷周の青銅器を多く所蔵した。文震孟・周順昌・姚希孟らと仲がよかった。時に往来しあい、古今を事績を討論し、酒を置いて談笑した。また、名利に無頓着で、もっとも絵画の原理に通じていた。小李將軍（唐・李昭道）の重なりあった峰々や顔料の重ね具合などを学んだ。華亭の董其昌はかつて三度も自分よりも優れているとし、三度も跋文を書いた。晩年はただ画を楽しんだ。後に、門下の客人が急に大官となり、顧凝遠を招こうとした。ところが、顧凝遠はそのことのために招きに応じることをいさぎよしとしなかった。門下の客人は怨み、策略を設けて顧凝遠を陥れ、僻地に遷らざるを得ないようにした。このために家産を使い果たして困窮し、憂いを懷いて亡くなった、という。

なお、ここでいう「にわかにな富貴となった門下の客」は、周荃を指すのかもしれない。周荃は、福王弘光帝の政権が崩壊すると、清政権から蘇州支配の副官に任ぜられる。その上、同治『蘇州府志』に、

芳草園は定跨橋の北に在り。明の青霞居士の顧凝遠 築く。一に「花溪」と名づく。國初、周觀察荃（周荃）の居る所と爲る……（同治『蘇州府志』巻第四十六・第宅園林二・元和縣・明・「芳草園」条・三十三葉）。

とあり、清朝の初めに、顧凝遠の園林に周荃が住んでいたからである。ただ、周荃は蘇州の人たちが無事に過ごせるようにたいへん尽力した人物であった（本稿（4）注5参照）。

朱子素（字は九初、号は湛庵。朱纓の孫。世々蘇州嘉定縣城内に居住する。明・崇禎十三年（一六四〇）の諸生）は、明季稗史初編本『嘉定屠城紀略』（『嘉定縣乙酉紀事』（痛史本）・『東塘日割』（荊駝逸史本））において、この事件の経過をつぎのように述べ、「三吳の禍 實に此れに本づく」と締めくくる。

乙酉五月初九日、南都 破れ、弘光 出亡す。

明・禮部尙書の錢謙益 率先して降附し、徳を東南に樹て、以て自ら吳の人士を解（仲裁する）かんと欲す。郡人の周荃は、[錢]謙益の客なり。口辯有り。密かに[錢]謙益の旨を受け、清帥の豫王に謁し、「吳下の民風は柔軟なり。檄を飛ばせば定む可し。兵を用いるを煩うこと無し」と言う。[豫]王 大いに悦ぶ。即日、官を拜し、降人の黃家鼎をして[周]荃を佐け、單騎もて吳中を安撫せしむ。甫めて都門を出るに、郡邑の長吏望風して印綬を解き、士大夫は皆な草間に求活（生きながらえる）して、過ぐる所 輒

ち降る。呉に至りて、黄家鼎 南面して自若たり（『東塘日劄』は「至呉郡，[黄] 家鼎 據察院，傲岸自若」に作る）。[周] 荃 獨り微服して市廛に出沒し，郡人 多く之が用を爲す（『東塘日劄』は「[周] 荃獨微服出入市廛，郡人多爲之耳目」に作る）。數日の後，明・監軍の楊文驄 兵五百人を率いて郡城に入り，[黄] 家鼎等を執えて市に戮し，庫銀を發取して滿載にして去り，之^ゆく所を知らず。[周] 荃 民間に匿れて免る。して[南京に] 歸る。豫王王[楊] 文驄の[黄] 家鼎等を襲い殺すを聞きて怒る。始めて兵を發して呉に入る。三呉の禍 實に此れに本づく，云う（都城琉璃廠留雲居士排字本『明季稗史初編本』卷十三所収『嘉定屠城紀略』・「乙酉五月初九日，南都破，弘光出亡」条・一葉）。

①樹徳：『左傳』襄公二十四年に「[叔孫] 豹聞之。大上有立德。其次有立功。其次有立言。雖久不廢。此之謂不朽（[叔孫] 豹 之を聞く大上は徳を立つる有り。其の次は功を立つる有り。其の次は言を立つる有り。久しと雖も，廢されず。此れ之れ不朽と謂う）：「最も優れた人は徳をたてて人々の手本となり，その次は功績をたてて人々に恩恵を残し，そのつぎはすぐれた教えを残し，人々がそれを守り，年月を経てもその徳や功績や教えは廃れない」といわれ，これが「不朽」であると私[叔孫] 豹は聞いております」。

明の時の禮部尚書であつた錢謙益は，率先して清政權に投降し，徳を東南地域に立てて，みずから呉（蘇州）の人たちと清政權との仲裁を行ないたいと思った。蘇州の周荃は錢謙益の門客で，弁舌の才能があつた。ひそかに錢謙益の命をうけ，清政權の豫王に拝謁し，「蘇州の人たちの氣質は軟弱です。布告文書を出せば帰順させることができます。軍隊の派遣に悩まれることはございません」と述べた。清政權の豫王は，たいへん喜んだ。即日，任官し，投降してきた黄家鼎に周荃を助けさせ，単騎で蘇州を接收させた。南京を出はじめると，各地の高官は，形勢を見て印綬を解き（明朝から任ぜられた職務を辞職する），郷紳たちは民間で生きながらえたいと思い，通過する先々で投降してきた。蘇州に到着すると，黄家鼎は統治者然として落ち着いていた。周荃はひとりお忍びで街の店舗に出入りし，人々は周荃のために働いた。数日後，南明政權の監軍の楊文驄が，五百の兵を率いて蘇州城に入り，黄家鼎らを捕らえて殺害し，蘇州の役所の金蔵を開いて財貨を滿載にしてどこへとも知れずに去って行つた。周荃は，人々の間に隠れて免れた。問道を通して豫王のところに戻つた。豫王は，楊文驄が，黄家鼎らを襲撃して殺害したことを聞いて怒り，軍を派遣して蘇州に入城させた。呉一帯の慘禍は，実にここに基ついたのである，という。

五月三十日

三十日にも楊文驄は，ひとりを捕まえた。

三十日，楊文驄 一人を^{とら}えて立ちどころに斬る（『吳城日記』卷上・「乙酉（順治二年）

五月三十日」条・二〇六頁）。

（五月三十日、楊文驄は一人を捕らえて、すぐに処刑した）

六月一日

六月一日には、周荃の使用人を捕らえて斬り、翌日にはまた三人を斬ったという。

六月初一日、周安撫（周荃）の家奴一人を^{とら}え亦た斬り^{とら}訖る。次の日、又た三人を斬る。總じて奸細と云う。二十九日に黃安撫（黃家鼎）等五人を戮して後、人情 憂懼（憂い恐れる）れて謂う「[この事は] 北兵を激怒さし、必ず玉石不分の禍有り」と。舟を買いて郷僻に避ける者は驚（あひる）の如し。若し楊君（楊文驄）をして果たして國の爲に倡義（挙兵）し以て興復を圖らしめば、誰が宜しからずと曰わん。[しかし] 究竟（結局）は一の萎瑣（軟弱）・無能なり、公に假りて私を濟すの輩なり。意は庫藏を垂涎とするに在るのみ（『吳城日記』卷上・「乙酉（順治二年）六月一日」条・二〇六頁）。

（六月一日、周荃の家奴ひとりを捕らえてまた処刑した。翌日には、さらに三人を処刑した。すべてスパイだというのである。楊文驄が、二十九日に黃家鼎など五人を殺害してから、人々は憂い恐れて「この事件は清軍を激怒させ、かならず好いも悪いも一緒の禍があるだろう」と言った。舟を買って村里に逃げ出す人たちがアヒルの列のようであった。もしも楊文驄がまざれもなく国のために挙兵し、復興をはかったのであれば、誰がよくないといえるだろうか。しかし、つまりは軟弱・無能で、公の名に借りて私を行なうの輩であった。気持ちは金藏を狙うことにあった）

蘇州の庶民たちにとっては、楊文驄の引き起こした事件は、せっかく清政権によって安定すると思われた蘇州をまた混乱させるだけのことであった。清政権による報復が行われることを予想し、人々は蘇州から逃げ出す。

『吳城日記』の著者は、蘇州の金藏だけが楊文驄の目当てであったと述べて、批判的である。これは、楊文驄を「色 厲しく内 荏なり（外見ばかりのかっこうつけで中身はまったくだめである）」とする『蘇城記變』の著者と同様の見解であった。実際に楊文驄がそのとおりの人物であったことは、翌日と翌々日に記される。

六月二日

初二日、士民の迫る所と爲りて、午前に北察院⁴⁾に進み坐す。隨いて府庠に至りて先聖に謁す。遍く各紳に明倫堂に於いて會晤し、共に守城の計を議せんことを請う。長洲[知縣]の李公（李實）是の日に於いて復して本縣に蒞（蒞）む。布置（処置）略ぼ緒有りと爲すに似たり（『吳城日記』卷上・「乙酉（順治二年）六月二日」条・二〇六頁）。

(蘇州の士民にせまられて、午前に北察院に行き着席した。つづいて府學に行き先聖を拝んだ。各紳士に面会し、一緒に蘇州の防御策を議論したいと願った。長洲知縣の李實は、この六月二日に復歸して仕事を再開した。処置はだいたい系統だっていたといえる)

ここでいう、「午前に北察院に進み坐す。隨いて府庠に至りて先聖に謁す。遍く各紳に明倫堂に於いて會晤し、共に守城の計を議せんことを請う」ということが、文秉の言及する「〔楊〕文聰 遂に自ら巡撫の事を行なう」(『甲乙事案』卷下・「順治二年(弘光元年)五月」条：本稿「五月二十九日」条参照) ことであろうか。もしもそのように考えることができれば、楊文聰の行為は「士民の迫る所と爲りて」行われたただけであった。つまりは、『吳城日記』の著者の述べるように、「金藏を狙うことにあり」、蘇州を拠点として明朝の復興をはかるといったものではなかったようだ。ただし、これは蘇州の一般の庶民からの観点であろう。

(つづく)

✓ 4) 北察院は、今の觀前街のひとつ南の通りの聞德坊にあった。

明の北察院は、聞德坊に在り。即ち元の海運都漕運萬戸府なり。至正の末、張士誠 改めて樞密院に分つ。洪武九年、改め建つ。後に池亭有り、東は射圃と爲す、〔割注：内に〔三國〕吳の鬱林太守の陸績の「廉石」^①有り、今は郡學の況鍾祠に移さる〕、其の右は即ち元の渠堰(堤防の役目をする建築物)所なり。亦た北西察院と稱す(乾隆『蘇州府志』卷第十四・公署二・廢署・吳長洲二縣・十九葉)。

①現在は、蘇州の文廟(碑刻博文館)に置かれている。